2010
vol.15
Jul

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
　　黄河の森緑化ネットワーク
代表理事／石　嘉　成
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／一 木　　仁
〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL&FAX 078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874

六甲山で植樹したヤマザクラが開花
（5面に関連記事）

CONTENTS

P.2　蘭州と神戸で緑化シンポ、写真展
P.3　2010年度KFG総会
P.3　役員改選など
P.4　私と環境(13)　庭木の健康診断⑤
P.4　絵本からのエコ・メッセージXI
P.5　黄土高原の植物XIV
P.5　お花見＆清掃登山
P.6　タケノコ狩り
P.6　植樹ワーキングツアーに参加して

ああ　あの大河
太古より　流れるほこり
ああ　その緑
永久に　たやさぬ心
燃えたつ生命
ここに　ここに

緑化テーマに神戸、蘭州でシンポジュームと写真展

蘭州 市民ら100人と意見交す

神戸からも17人参加

今年は三井物産環境基金助成事業（三井プロ）の最終年。３年にわたる事業の締めくくりとして、植樹やボランティアに関するシンポジュームと写真展を、２月に神戸で、６月には蘭州で開催しました。

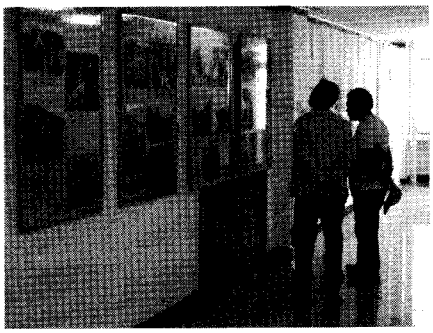
蘭州市では６月13日、同市南北両山緑化指揮部と共同で、第一期植樹基地博覧園で開催しました。このイベントには日本から17名の会員が参加し蘭州市の人々と意見交換し、親睦を深めて参りました。

シンポジュームには蘭州市副市長、市外事弁公室主任、指揮部からは馬金山総指揮，王万鵬処長はじめ多くの方が参加しました。ＫＦＧからは、パネラーとして林青彦常務理事と徳岡正三顧問が演壇に上り、ＫＦＧの活動報告や三井プロ３年間の成果報告、今後の植樹活動の展望を発表しました。

写真展は６月13日から３週間程度開催される予定で、２月に神戸で開いた写真展で展示した写真を展示しています。

総勢100人を越す蘭州市民と共に植樹に関する写真展・シンポジュームを中国蘭州市で開くことが出来た事自体が我々の大変な成果であると考えています。

蘭州でのシンポジューム



蘭州での写真展

蘭州市南北両山緑化指揮部との植樹支援活動の契約は１期，２期を通して８年が終了しました。今後も指揮部と連絡を密に取り合いながら、市民との協働植樹などを通じて、ますます交流を深めて行く予定でいます。皆様の一層のご支援をお願い致します。

日本NPOの役割は？

京阪神３団体 神戸でシンポ

神戸でのシンポジュウムは２月13日、神戸・三宮の中華会館で開きました。黄土高原で緑化支援活動を展開している大阪の認定ＮＰＯ法人「緑の地球ネットワーク」（ＧＥＮ）、京都のＮＰＯ法人「環境保全ネットワーク京都」（ＥＳＫ）、それに私たちＫＦＧの３団体が参加。「中国の緑化とボランティア活動－日本のＮＰＯの役割－」をテーマに支援交流の在り方を探りました。

ＧＥＮは山西省大同市で中華全国青年連合会をカウンターパートに20年近く活動し、めざましい成果を挙げています。ＥＳＫは陝西省の西安、渭南、咸陽の各市で2002年から活動、小グループながら着実に結果を出しています。

シンポは３部構成で、Ⅰ部はＫＦＧの創立の経緯とこれまでの活動を矢野正行事務局長が紹介。Ⅱ部は関西二期会・神戸音楽家協会会員の濱崎加代子氏によるソプラノの独唱を楽しみました。

Ⅲ部パネルデイスカッションでは、芹田健太郎兵庫県国際交流協会参与がコーディネーターを務め、高見邦夫ＧＥＮ事務局長、北川秀樹ＥＳＫ代表理事、徳岡正三ＫＦＧ顧問がパネラーとして登壇。各団体の活動や成果の紹介と将来展望や問題点などを提起し、討議に移りました。

このシンポジュウムから浮き彫りになったのは次の２点です。

ⅰ．中国の経済発展に対応した支援はどのようにあるべきか

ⅱ．草の根の交流をどのように進めるか

ⅰでは、①都市と農村部の格差があり、特に農村部で環境教育など環境保護意識の向上を支援することに意義がある②こうした農村部を含め、経済発展から取り残されていると思われる地域を対象とする③経済発展を担う中国企業が緑化のための資金提供にいっそう積極的となることを期待する④一般の市民からも緑化のための寄付を募る仕組みなどを考える必要がある⑤海外から問題点などを指摘する必要がある⑥資金よりも技術協力が求められてくるのではないか―などの意見が出ました。

ⅱでは、中国ＮＧＯが話題になり、これとの交流をめざすとの考えが述べられる一方で、中国ＮＧＯの位置づけが不明確であるとの指摘もあり、結論的な話は得られませんでした。

ＫＦＧは「国際親善」「現地の人と共に木を植える」を定款の第３、５条にうたっており、これは草の根の交流を意味します。この目的を達成するために、１つは中国ＮＧＯを通じた方法があるのではないかと考えます。具体的にはＧＣＢを通じた交流から、一般市民との交流が推進される機会があります。

黄土高原の緑化支援にかかわるＮＰＯ３団体が一堂に会し、お互いの活動への理解を深め、考え方などが共有できたことは大きな収穫でした。おしむらくは参加者が30名程度とやや少なかったことです。情報の発信に向けて、さらなる努力が求められています。

神戸でも１週間写真展

緑の大切さを訴えた神戸での写真展

神戸での写真展は２月11日から17日まで、元町アートギャラリーで開催。Ａ３大の写真を２枚１組にしたパネル38枚、組写真パネル２枚にそれぞれ解説文と地図を載せました。写真はＫＦＧ会員が撮影した黄土高原と植樹20点、ＧＣＢ提供の６点、指揮部からの３点を中心に、神戸周辺の大樹や六甲山の緑化の歴史などでした。入場者は107人で、ＫＦＧの活動をアピールできました。

蘭州３期推進にご協力を

KFG総会　共同植樹など継続

特定非営利活動法人「黄河の森緑化ネットワーク」第７回通常総会が５月29日、神戸市の中華会館で開かれました。2009年度事業報告書及び監査報告書、10年度事業計画書及び収支予算書、定款変更、役員改選―の４議案を原案通り満場一致で承認しました。

正会員総数252名のうち、有効出席者132名（当日出席者27名，委任状提出者105名）での開催です。開会に先立って昨年１１月に死去した林同春代表理事のめい福を祈り、黙とうしました。

あいさつに立った石嘉成代表理事は「リーマンショック後、会員数の確保や寄付金収入面などで逆風が強いが、蘭州第３期を推進するために、これまで以上のご協力をお願いしたい」と訴えました。

10年度は三井物産環境基金助成事業（三井プロ）が６月で終了します。６月に蘭州市で緑化シンポジュームや写真展と開くほか、三井プロの３年間のまとめや蘭州市民アンケート報告書の作成、９月のワーキングツアーと蘭州市民との協働植樹などを予定しています。

ベニスナ植樹継続などを決めた
ＮＰＯ法人黄河の森緑化ネットワーク総会

今後の植樹活動については、資金面から蘭州第３期の事業契約は一時延期し、年間50万円でベニスナ植樹など緑化を継続することになりました。さらに新しい補助金獲得に向けて検討するため、蘭州でのシンポに合わせて新たな植樹候補地の視察を予定しています。

国内活動では、六甲山・住吉山手での植樹、下草刈り、清掃登山など地道な活動に取り組み、「森の世話人」の称号に恥じないよう努めます。

定款変更では理事数を現行の３人から21人を、３人から18人に減らしました。

総会後は例年と趣向を変えて、泌尿器科の愛新啓盛医師が「泌尿器科の立場から見た日々の健康管理」と題して講演しました。

愛新医師は、加齢とともに増加する夜間頻尿、男性の前立腺肥大・同がん、女性の失禁などについて、原因や治療法を分かりやすく説明。年配者の多い会員からは、講演後も質問が相次ぎました。

ロビーでは恒例の緑化写真展が開かれ、神戸の写真展に出展されたパネルの一部が飾られました。参加者らは蘭州市の緑化の進展ぶりや、明治初期に六甲山がハゲ山状態だったパネルなどに見入っていました。

代表理事に石嘉成氏

６月１日付けで理事，監事の一部が新しい顔ぶれに変わりました。

代表理事は昨年度途中から就任した石嘉成氏が引き続き務めます。副代表理事は永山勝司，林文明の２氏、常務理事には林青彦、麦兆良、矢野正行（事務局長兼任）の３氏。理事は李雲精、安本昭久、清水重幸、大谷晃一、玉手洋江、一木　仁、中谷安廣、秋山榮、久保忠彦、金啓功、小川良太、馬文璧の各氏。監事には辻恵子、荘天輝、池田智の各氏が就任しました。

事務局だより

◆国税の認定ＮＰＯ法人に

７月１日付で大阪国税局から、税制上の優遇措置が受けられる認定法人として認められました。2015年６月30日まで５年間有効です。

認定ＮＰＯ法人になれば、寄付者に対して優遇税制が適用されます。個人の場合は所得税の寄付金控除の対象となります。法人は法人税の一般寄付金の損金算入限度額に加え、別枠の損金算入限度枠が設けられることになり、より有利といわれています。相続や遺贈の場合も、相続税の課税対象から除かれます。

ＫＦＧにとっても、認定を受けたことでみなし寄付金制度が適用され、収益事業に要した費用を一定の範囲で損金算入することが可能になります。また、認定を受けるために経理や組織を強化したことで、内部管理がしっかりし、さらには、社会的な信用が高まるとされています。

同国税局の話では、認定を受けたからといって急に寄付が増えるわけではないそうですが、寄付受け入れの条件整備が進んだことは間違いありません。多くの寄付を頂けるよう努力いたしますので、よろしくお願いいたします。

◆秋のワーキングツアーのお知らせ

６月には蘭州での写真展・シンポジューム、さらには敦煌へのツアーに多数ご参加いただきありがとうございました。今年は連続になりますが、９月にも恒例のワーキングツアーを実施します。たくさんの方のご参加をお願いします。

日程は９月19日（日）に関空を出発し、同26日（日）帰着の７泊８日の旅です。上海―蘭州―西寧―ラサ―上海と巡り、上海（19日）では夕方に万博を見学。20日は蘭州に移り、市民らとベニスナなどの低潅木を協働植樹します。

西寧―ラサ間は人気の青蔵鉄道の旅をお楽しみいただきます。青海湖や青蔵高原に広がる大草原と野生のヤクやカモシカ、鉄道では世界一高い海抜5072㍍のダーダラ峠越えなどが話題となっているルートです。ラサではポタラ宮やチベット博物館などを見学します。ラサ―上海は飛行機を利用します。

費用は植樹活動費を含み26万円。申し込み・問い合わせは８月13日までに神戸華聯旅行社（☎078-391-5185）へ。

◆三井物産環境基金助成事業および蘭州市民緑化意識アンケートの報告書発行

2007年から３年間にわたり、蘭州２期植樹として展開してきた三井物産環境基金助成事業（三井プロ）の成果と課題をまとめた報告書がまとまりました。また、助成事業の一環として、蘭州市民を対象に実施した緑化意識アンケートを解析、報告書にまとめました。ともにＫＦＧ顧問の徳岡正三先生の労作で、100ページを超えます。ご入用の方は事務局までご連絡ください。費用は要りません。

私と環境(13) 庭木の健康診断 ⑤

── 庭木の環境 適地 ──

樹木環境研究会議「ミルフィーユの会」
天 野 孝 之

植物は根の部分で多くの水分、養分を吸収し、葉の部分で炭酸同化作用を行なって生育しています。花、葉、枝幹など目に見える地上部ばかりに気を取られがちですが、目に見えない地下部の根の環境についても、地上部以上に注意を払う必要があります。

庭木の大切な根を健全に育てるためには、土壌の条件が重要な役目をしています。排水性、保水性、通気性、保肥性が優れていることです。このほかに有機物の混合割合、庭土の比重、土壌pHなども大切です。

宅地造成された場所では、そこが盛り土された場所か、あるいは切り取られたのかを、確認しておく必要があります。盛り土された場所では、もとあった土の表面と盛られた土の境がはっきりしており、排水や庭木の根の伸長に大きな影響を与えます。山土が切り取られた庭では、腐葉土をいれ、施肥などを行い、新しく庭木に適した土壌に改良して行かなくてはなりません。宅地造成時の大型機械は、土壌の粗孔隙をつぶし土壌中の隙間を減少させるので、透水性、通気性が損なわれます。水田跡に造成された宅地では、水田の不透水層が残り加湿な状態になり、根の伸張が抑制され根腐れをおこします。

土壌は常時適潤で土壌動物や微生物が数多く生息しています。ミミズ、ヤスデ、オカダンゴムシ、ササラダニなどの土壌動物は、生物遺体や腐植を食べて糞としながら、土壌を撹拌し、膨軟化、団粒化を促進して、良好な土壌にします。また細菌、糸状菌などの土壌微生物は、生物遺体の分解や腐植化に役立っています。したがって土壌動物が多く見つかる庭は、排水性と保水性が良く肥沃で庭木にとってたいへん成育のしやすい土壌です。庭木にとって、土壌は根を張りその大きな樹体を支える場であると同時に、根系を通じて成長に必要な水分、養分や空気を吸収する場でもあります。したがって、土壌中の環境が庭木の成長の良否を直接支配します。庭木にとって良い土壌条件とは、適切な水分、養分、空気があり、庭木を支えるだけの重さのある土壌が、地表から十分な深さまである必要があります。これらの条件を満たすためには固相（植物を支え安定させる個体部分）、気相（呼吸のため必要な気体部分）、液相（養分を含んだ水の部分）という三つの相のバランスがとれ、しかも良い状態を保ち続ける土壌が、よい庭土といえます。雨が降ると土壌中の気相に、水が浸透していきます。その分、気相が少なくなります。この状態がいつまでも続くと土壌中の酸素がなくなり、根は呼吸が困難になって、腐り死んでしまいます。

地球の重力によって水は地下深いところへ移動しますが、土壌の性質によって、水の移動する速さが異なってきます。粘土などは水持ちが良く、なかなか水は移動しません。しかし砂地ではすばやく移動し、地下水となります。これらの中間の土壌、つまり根に必要な水分を保ち、なおかつ必要以上の水分は速やかに排水され、その空隙に新しい空気を取り入れて、庭木を健やかに育てることのできる土壌が最良の庭土です。湿らせた土を指先の上でこねると、砂の感じを1/3～1/4ほど感じる程度の土壌です。この範囲の土が水分、空気を十分供給できる土です。

散水や雨水は一時的に気相内に水分を取り入れることによって、気相内の古い空気を新鮮なものにいれかえる働きもあります。

ボタン鍋の会

今年11月下旬の土曜日に、丹波市山南町の民宿で、夕食にボタン鍋を楽しみ、翌日は丹波竜発掘現場など見学します。宿泊費は7000円程度。日時，集合場所，時間等は後日連絡します。先着15人。

絵本からのエコ・メッセージ XI スイミー

KFG会員　畑 中 弘 子
（児童文学者）

この絵本のサブタイトルは、「ちいさなかしこいさかなのはなし」

主人公スイミーのことです。広い海にたくさんの兄弟たちとくらしています。みんなの身体は赤色でしたが、スイミーは黒色でした。ある時、おそろしいことにであいます。まぐろが兄弟たちを全部たべてしまったのです。

ひとりぼっちになったスイミーは海をさまよいます。くらげや伊勢エビや、みたこともない魚たちにであい、ドロップみたいな岩やわかめの林をとおり、うなぎやいそぎんちゃくなどをみて、少しずつ元気をとりもどしていきます。

そして、自分とそっくりなたくさんの魚をみつけました。

「でてこいよ。おもしろいものがいっぱいだよ」ところが「大きな魚にたべられてしまうよ」と言って、岩かげにかくれたまま動きません。スイミーは一生懸命考え、やっと思いつきました。

「みんな一緒に泳ぐんだ、海で一番おおきな魚のふりをして」

みんなが一匹の大きな魚のように泳げた時、黒い身体のスイミーが目になって、広い海をゆうゆうと泳ぐことができるようになりました。真の知恵は先のみえない困難をも切り開くものだと思わされたことです。

レオ・レオニ　文絵
谷川俊太郎　訳

黄土高原の植物 XIV

サキョク（沙棘）を植えてお金もうけ
－収益金をさらに緑化に回してはという話－

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

数年前に、十数年ぶりに北京の王府井（ワンフーチン）の大通りを往復した。一帯は歩行者天国となり、歩ける範囲は広くなっていたが、それでもややゆったり歩けるのは真ん中だけで、両側の店に近づくほど、以前と同じように人ごみに巻き込まれる。時間がなかったので真ん中を駆け足で新華書店へ直行し、そこで本を６冊購入して、また駆け足でもどった。

新華書店（レジ袋には王府井書店とあった）は立派な本のデパートに改装されていた。最上階に農林関係の図書がわりと豊富にそろえてあった。ここで筆者の目を引いたのがサキョク（沙棘、シャー・ジー）の本である。書名が「沙棘・・」あるいは「大果沙棘・・」とある本が３冊もあった。つまりサキョクに関する単行本が３種あったのである。

サキョクはグミ科の低木で赤味のあるミカン色の小さい実がなる。この果汁と種子にビタミン類などが豊富に含まれ、健康増進や薬用に利用されている。根に放線菌が共生して空中窒素を取り込み、土壌改善にも役立つ。15年ほど前にはサキョクの単行本が１冊しかなかったが、その数年後にもう１冊が出版され、今回新たに３冊をみることになった。合計で５冊になるが、低木で単行本が出ているのは他にはこのシリーズのNo. ６で紹介したネイジョウ(檸条)しか筆者は知らない。要するに、サキョクは中国でおおいに注目されている低木なのである。日本ではどうか。インターネットで沙棘あるいはサキョクと入力するとそれなりにヒットする。日本でもサキョクの製品が取り扱われているのが分かる。

サキョクの果実と葉（枝には鋭い刺がある）

このサキョクはＩ期の緑化支援地で試験的に植栽されていた。残念ながらそこでは生育できないようで、その後いつのまにか見かけなくなった。しかし蘭州の他の地域や甘粛省では栽培され、おみやげにサキョクのジャムをいただいたことがある。

かつて筆者は西安や内蒙古のフフホトなどでサキョクの製品を捜し求めたことがあるが、ジャムをいただいたとき、改めてサキョクがよみがえった。

今ＫＦＧの予算は逼迫しており、十分な支援がむずかしい状況だという。一方中国の経済発展には目を見張るものがあり、無償資金協力はその役割を終えつつあるのではないかとう意見もある。しかし中国には広大な荒れ地が広がり、これを原因とする韓国や日本への黄砂被害はむしろ増えているように思われる。荒れ地の緑化は日中協力して今まで以上に強める必要がある状況は変わらないといえる。

ただ、協力の方法は再検討の時期に来ているのかもしれない。顧問という気軽さから、また日本人と華僑の組合せというＫＦＧの特色から、次のような提案をしたい。現地でサキョクによるお金もうけもねらった緑化事業を起こし、そこからの収益を次の緑化資金にあてるのである。さて、どのようにして虎穴に入るか、はたまたネコに鈴をつけるか。

昨年のクリに続き、今年はサクラ開花　住吉山手

神戸・住吉山手植樹地のヤマザクラ観賞会を兼ねた「第13回清掃登山」が４月10日行われました。花は早咲きなのか大半散っていましたが、２本の木に数10輪（**１面に写真**）が残っており、参加した会員は缶ビールで乾杯し、お花見を楽しみました。

花は淡いピンク色で、葉陰に隠れてポツポツとしか見えません。１本は20数輪、もう１本は10輪程度とやや寂しかったのですが、花が散った後のガクが多数残っていて、満開の時期はさぞきれいだったろうと思わせました。２本とも2005年から06年にかけて植樹したもので、４、５メートル近くにまで育ち、今年は花を咲かせるのではないかと期待が高まっていました。

昨年６月の下草刈り時には同時期に植樹したクリの開花が確認されました。春は花見、秋のクリ拾いと植樹地は形を整えつつあります。

また、植樹地の一角に、六甲山系グリーンベルト整備事業を紹介する看板＝**写真**＝が六甲砂防事務所の手で立てられました。新聞見開き大の大きなもので、整備事業の意義や現地の管理をしている森の世話人として、KFGが紹介されています。

清掃登山には、六甲砂防事務所の担当者を含め13人が参加。午前９時に阪急岡本駅をスタートし、保久良神社－金鳥山－森林管理道－打越峠－五助堰堤下－渦が森橋－植樹地のコースで、約３時間半ゴミを拾いながら、ハイキングしました。

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹 －住吉山手７期植樹－

- ●2010年９月４日(土) 下草刈り
  2011年３月初旬　７期植樹及び
  1～6期植樹地の枯れ木植え替え
- ●集　合　ＪＲ住吉駅南側 ９時
- ●服　装　長袖、帽子、運動靴
- ●持参品　弁当、水筒、軍手、雨具、タオル

六甲山クリーンアップ活動
－身近にできることから始めよう －

- ●日　時　2010年10月９日(土)
- ●集　合　阪急岡本駅 ９時
- ●歩　行　約３時間
- ●コース　当日朝、発表します。
  ミステリーハイクをお楽しみに
- ●持参品　弁当・水筒・雨具・タオル・ビニール袋・軍手
- ●リーダー　矢野 正行
- ●サブリーダー　安本 昭久

参加できる方は
事務局までお知らせ下さい

若竹の香り、甘さ満喫

京都 和束町

タケノコ狩り楽しむ

４月29日は朝方の雨も上がり、竹の子狩りには絶好の日和でした。

ＪＲ加茂駅に集合後、お茶や竹の子の産地として有名な京都・和束町に向かいました。到着後、蕨採り。短時間で、両手いっぱいの収穫があり、持て余していると、李雲精さんがビニール袋を渡してくれました。常に気配りを怠らない李さんの準備周到さには頭が下がります。

いよいよ竹の子掘り。「雨後の竹の子」の言葉通り、竹林の彼方此方に頭をのぞかせているが、掘るのは思いのほか力仕事です。竹林の持ち主である池田さんは当然として、非力な考古学者だと思っていた小川さんの強力にも驚かされました。矢野さんの馬力もドライバーを持たせれば、プロ並みの飛距離であろうと思わせる程の凄まじさでした。

収穫のタケノコを前にニッコリ

池田さんの勧めで、掘ったばかりの竹の子を食べてみました。シャキシャキした歯ごたえ、ほのかな甘み、豊かな香りがたまりません。

参加者10名で40本近い竹の子を分け合い持ち帰りました。小振りと思っていた物でも鍋に入らない程大きく、育ち過ぎと感じていた物も根元まで柔らかく、定番の木の芽和えや若竹煮からステーキ、青椒肉絲など十分満喫しました。

植樹ツアーに参加して

思いがけない列車の旅

常務理事兼事務局長　矢野 正行

2008年５月の地震発生とテロため、植樹では２年ぶりの中国蘭州市訪問となった。

今回の訪問では、三井物産環境基金補助事業のメインテーマである、現地ボランティアとの協働植樹を成功させると言う大目標があった。当日は現地ボランティアの参加が考えていたより少なかったのは残念であるが、現地植樹ボランティアと一緒に毎年蘭州市で植樹を行う事は達成できると確信でき大成功であった。

第二の目玉であった、昨年義援金を贈呈した小学校を訪れると言う目的は想像以上に大変な行程になった。出発前に日本で甘粛省武都市の位置を確認はしていたのであるがやはり中国は広い。蘭州のホテルを出発し天水に向かいそこで１泊するまでは楽しいバス旅行であった。ところが次の日、天水から武都の小学校にむかうのに10時間を要し、とんでもないバス旅行になった。道路は山道で狭く曲がりくねっている。その道路が地震で寸断され、復旧のため迂回路や片側通行が沢山あるうえ舗装が充分でなく砂埃で前が充分見えないくらいひどい状態であった。それでもバス運転手さんの頑張りもあり、夕方５時ごろ約３時間遅れで小学校に到着した。

小学校では全校児童の歓迎を受け、先生方との懇談も行った。我々の送った義援金は学校の正門の整備や塀の修復に使うとの事であった。校舎自体の損傷は大きくなくすでに政府の補助金で修復を完了していた。

次の日、西安に向うのであるが、時間が読めないと言うことで急遽バスから電車に変更し、朝５時出発で再び７時間をかけて天水駅に引き返した。天水で列車に乗ったのが午後２時頃、特急列車の普通席である。バスの窮屈な座席から開放されたこともあり非常にゆったりとした座り心地の良い座席であった。しかし、何よりも良かったのは、列車に車内販売がありビールを売りに来てくれたことである。確か５元と記憶しているが日本で言う大瓶である。冷えてはないがこれをラッパ飲みするのである。これがなかなか乙なもので、中国の列車旅行には大変良く合う。私は西安到着までの４時間弱の間に２本頂いたがバスでは経験できなかったことである。

西安に向かう途中には、あの三国志で有名な諸葛孔明と司馬仲達が戦い「死せる孔明、生ける仲達を走らす」で知られる五丈原があり、予期していなかった史跡にみんな興奮気味であった。五丈原はその名の通りまったくの原野で山，川からは遠く離れており、日本の古戦場のような山あり谷ありではなく、戦略は指揮官の心の読み合いで腕と頭の見せ所であったろうと思われた。

やはり中国は広い。今回の短い列車の旅で強烈に印象に残ったことは、列車が西安に着く前大変滑らかにスピードを上げ、時速150㌔で走行していたことだ。この乗り心地の良さはレール間隔の広さと地形の広さから来るのであろう。今後中国では時速300㌔の新幹線を走らす予定らしいが、このレールの線形の良さがあればさぞ快適な旅が楽しめると思う。新幹線でなくとも、ぜひもう一度列車の旅をしてみたいものだ。